

授業支援のための教材制作の試み

米満 潔^{*1}・河道 威^{*1}・古賀 崇朗^{*1}・久家 淳子^{*1}・穂屋下 茂^{*2}
 Email: yonemik@cc.saga-u.ac.jp

*1: 佐賀大学 e ラーニングスタジオ
 *2: 佐賀大学全学教育機構

Key Words アクティブ・ラーニング, LTD, FD/SD

1. はじめに

大学教育において、学士力や就業力について効果的な教育手法や評価方法の確立が求められている。しかし、それらに関する情報は、まだ多くない。そのため、限られた情報をもとに試行錯誤しながら教育手法の確立に取り組んでいる教職員も少なくない。

そこで、本事業では、教職員のための体系的な教育手法などを学ぶ教育研修プログラムを企画した。このプログラムは、学生に学ぶ姿勢を形成させるクリティカル・シンキングや教育手法であるアクティブ・ラーニングや反転授業や学習到達度の評価方法であるルーブリックについて解説や実例といった有益な情報を教職員へ提供することで、授業支援のための教育手法や評価方法を修得・深化させることを目的とする。

これらの教材は、これまで本学で開催された FD/SD 講演や研修を記録した DVD や VOD 型 e ラーニング教材を参考に、本学の教員や他大学の教員等による講演や授業を撮影・編集して制作する。本稿では、これら教職員向けの授業支援のための教材制作について報告する。

2. 教育研修プログラムの立案

2.1 背景

大学教育で、自身の意見を表明したり、事象を説明したりするための表現力やコミュニケーション能力が身につかないまま卒業していく学生が多い。そのため、それらの学生は、採用試験や就職活動における面接で、良い結果が得られにくい傾向がある。そのため大学教育において、学士力や就業力について効果的な教育手法や評価方法の確立が求められている。

ところが、教職員の多くは、学生にこれらの能力を身につけさせるスキルを有していない。しかしながら、限られた情報をもとに試行錯誤しながら教育手法の確立に取り組んでいる教職員も少なくない。つまり、教職員のための体系的な教育手法などを学ぶ教育研修プログラムがあれば、そのような教職員にとって有益となる。

また、このような授業は、教職を目指している学生だけでなく、企業志望の学生にとっても、アクティブ・ラーニングのスキルは ICT 活用能力とあわせて修得する機会となる。これらの能力は、一朝一夕に修得できないが、体験を通して考え方や一般的な進め方を理解するには有効な方法となる。

2.2 目的

プログラムの目的は、教職員が教育手法と評価方法について修得・深化を図るものとした。そのため、作成する教材の内容は、単なる手法の解説だけでなく、授業として学生相手に教育手法を実践した授業の映像などを利用する。講師の講義だけでなく、受講している学生の反応や活動の様子も撮影し、教職員が実践する際に有益な情報となるものとする。

また、週に 1 コマの実践ではグループワークなど協同作業の時間が分断されたり、学生の欠席などでグループが成立しなかったりと、効果的な授業とはならない。そのため、授業の形態は連続した授業が可能となる集中講義として実施する。

これらの講義を撮影・編集し DVD 化および e ラーニングコンテンツ化し FD/SD の教材として提供する。これを教員が視聴することにより学んだアクティブ・ラーニングの手法を各々の授業に組み込めるようにする。

2.3 計画

前節の内容を実現するためには、実施する機会と講師の確保が必要である。授業をしてもらえるだけでなく、その授業を撮影させてもらえて、授業に使用した資料を教材として利用することを許可してもらえる講師を選定しなければならない。

本学の教職員の都合がつかなかったこともあり、他大学で同様の取組を実践されている教員の方を外部講師として招くことにした。休暇中に実施する集中講義としたことで、近隣の大学以外からも外部講師の確保が可能となった。

2013 年度は、「理工学部スタートアップセミナー」と「授業支援入門」を実践することとした。

3. 教材制作のための実践

教材作成のための実践である「理工学部スタートアップセミナー」と「授業支援入門」について、以下に概要を述べる。

3.1 理工学部スタートアップセミナー

これは大学の正規授業科目ではなく、2013 年度に佐賀大学理工学部同窓会が主催した理工学部新入生向けのセミナーである⁽¹⁾。したがって単位はない。

内容は大学生としての学びに必要なクリティカル・シンキングとロジカル・ライティングであり、ア

イス・ブレイクやグループ活動で KJ 法も実践した。講師は、教育関連企業に所属されていて他大学でキャリア教育を担当されている方に依頼した。日程や講師について表 1 に示す。

3.2 授業支援入門

大学の 2013 年度の正規授業科目であり、デジタル表現技術者養成プログラムの選択科目で集中講義として開講された。対象は、1 年生で、教職を目指す学生が対象とした。ただし、教職以外を志望している学生でも受講可とした。

内容は、アクティブ・ラーニングを中心とした教育方法とルーブリックやその基礎となる統計処理を含めた評価方法である。本学の教員と上記の内容を先導的に実施している他大学の教員のオムニバスで授業を行った。日程や講師について表 2 に示す。

4. 教材制作

4.1 撮影

多様なアクティブ・ラーニングの実践である外部講師の授業は、すべて撮影した。撮影は、2 台の HDV カメラで行った。対面授業形式の講義の場面では、1 台のカメラは講師のアップを撮影し、もう 1 台はスクリーンに投影された PowerPoint のスライドを撮影した。また、グループワークなど学生が作業している場面では、それぞれ講師の動きを撮影するカメラと学生の様子を撮影するカメラとした。

講師の音声を明瞭に録音するために、講師には無線ピンマイクを付けて授業を行った。これにより音声は講師を撮影しているカメラにセットした無線ピンマイク用受信機を介してカメラ映像とともに記録される。教室内への教師の音声伝達と学生の音声の伝達のために講師と発言者には無線ハンドマイクを使って話し、スピーカーで教室内に出力した。これによりもう 1 台

表 1 「理工学部スタートアップセミナー」の概要

名称	理工学部スタートアップセミナー（2013年度）		
期間	2013年4月13日（土）～14日（日）、20日（土）～21日（日）		
概要	理工学部新入学生対象（定員40名） クリティカル・シンキングとロジカル・ライティング 理工学部同窓会主催のため単位無し		
日程	講師	テーマ	
1日目	4月13日	企業より派遣された講師	アイス・ブレイク、クリティカル・シンキング(1)
2日目	4月14日		クリティカル・シンキング(2)
3日目	4月20日		KJ法、ロジカル・ライティング(1)
4日目	4月21日		ロジカル・ライティング(2)、グループ発表

表 2 「授業支援入門」の概要

名称	授業支援入門（2013年度 集中講義）			
期間	2014年2月18日（火）～21日（金）			
科目概要	デジタル表現技術者養成プログラムの選択科目（単位有り） 1年次の学生対象（定員40名） 教職を目指す学生が対象だが、限定はしていない			
	講師	所属	テーマ	
1日目	2月18日	安永 悟	久留米大学	話し合い学習法（LTD）、協同学習
2日目	2月19日	椋本 洋	立命館大学	ルーブリック、統計処理
3日目	2月20日	秦 敬治	愛媛大学	ブレイン・ストーミング、KJ法
4日目	2月21日	穂屋下 茂	佐賀大学	反転授業、タイムマネージメント



図 1 撮影の様子

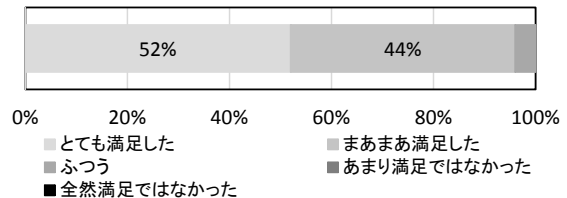


図 2 学生の満足度

のカメラで教室内での講師の音声だけでなく学生の発言も録音できた。撮影の様子を図 1 に示す。

4.2 編集

撮影した映像は、パソコンに取り込み、動画編集ソフトにて編集した。授業すべてをそのまま視聴するには時間がかかり要点が捉えづらいため、1 日の授業を 90 分程度に編集した。編集にあたり、教職員が教材として視聴することを考慮し、以下の点に留意した。

- 1) 授業の流れがわかる
- 2) 講師が講義で伝えたい意図がわかる
- 3) 講師の指示と学生の反応が確認できる
- 4) 重要な指示や用語の説明あるいは場面の切り替えにテロップなど文字での説明を加える

編集した映像は DVD 化し、希望する教職員に教材として貸与する。

5. おわりに

「授業支援入門」を受講した学生に対して実施したアンケートで高い満足度が得られている(図 2)。また、今後役に立つ内容との回答も得られている。このことから、今回教材作成のために実施した授業の内容は学生にとって有益であったといえる。

原稿執筆時点で、「理工学部スタートアップセミナー」については DVD2 枚組の教材として完成しており、「授業支援入門」については各講師に確認と校正の依頼中である。いずれも、まだ多くの教職員に視聴されておらず、教職員からの評価は得られていない。したがって、今後は、多くの教職員に視聴してもらえるよう広報活動や e ラーニングコンテンツ化を図る。あわせて教職員からの評価を受け、教材としての有効性をはかるためのアンケートの作成なども行う。

参考文献

- (1) 米満 潔、河道 威、田中正和、穂屋下 茂：“理工学部新入学生対象スタートアップセミナーの実施”，PC カンファレンス 2013（東京大学）（2013/8/5），pp.345-346